

2022年9月30日（金）

老球の細道692号

9月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

何事もやり続ければ上達する。バスケットボールで学んだ人生訓である。9月に入ってからトンボ採りは、それまで不可能だとあきらめていたギンヤンマをやすやすとゲット。そしてシーズン終盤に来て遂に孫息子は飛んでいるオニヤンマをゲットした。「ネバー・ギブ・アップ」「ネバー・ツー・レイト（今からでも遅くない）」「ネバ、ネバ納豆（Not）」。

1・テレビから

◆「かわいい時期に かわいい孫との時間は最高だ」〈NHK『未来へ』〉：今どきの子どもたちは外で遊ばない。近所でとびまわって遊んでいるのを見たことがない。その結果、孫は私を遊び友達、遊び道具に選ぶ。私の時間が奪われるが、満面の人たらし笑顔に負けてしまう。

◆「悲しいのは美しい夏が終わるから 冷たい風が吹き 木の葉ははぎとられ 小川に流れてゆく 愛しい川よ 春はまた来る しかし若さは戻らない 二度と戻らない」〈NHKBS：世界のドキュメンタリー『ゴルバチョフ老政治家の遺言』〉：世界の歴史を変えた数少ない政治家の1人、旧ソ連のゴルバチョフ。国葬にされず一人寂しく逝った。生前彼の愛した詩の一節である。自然は繰り返すが、人生はたった一度。身に響く一節である。

2・読書から

◆「ニュートンはどうしてさまざまな発見をなしえたか？発見にいたるまでいつもいつも考えることによって、問題をいつも自分の前におき、暁の瞬の光が差し込み、それから少しずつ明るくなり、本当にはっきりするまでじっと待つ」〈荻原明男著『人類の知的遺産・ニュートン』講談社〉：感染症（ペスト）の流行で田舎に帰り、仕事なくなったのを幸いに研究、創造活動に没頭するニュートン。そこで世紀の大発見「万有引力の法則」をゲット。

◆「一匹の人間が持っているだけの精力を一事に傾注すると、じっさい不可能なことはなくなるかも知れない」〈森鷗外著『雁』河出書房・日本文学全集〉：夏目漱石にライバル心を抱いていた文豪。没後100年で今年は何かと話題に上る。言っていることはシンプル。

3・新聞、パンフレット等から

◆「やっぱり野球がすべてではないということですね。野球がうまかったら、なんなん？子どもたちにも常に言っていました」〈朝日：スポーツ×教育〉：わが子3人を甲子園選手にした母親の言葉である。3人とも野球の超名門校に入学したが両親は野球経験なし。子育てのルールはあくまでも人間性。まずは学校生活重視で、天狗にさせないことだという。

◆「決断の際、私には五つのルールがある。①迷ったらワクワクする方を選ぶ②リスクで比べず、思い通りにいったゴールを想像する③あえて困難な方を選ぶ④二兎を追って努力する⑤自分の選択に後悔しないこと」〈朝日：進路わたし流・伊藤塾塾長〉：バスケットもデシジョン・メイキング（状況判断）が重視される。良い判断をするには自分なりのシンプルなルールを持つことが重要である。私も若い時は「マイナスを選べ」。今は「プラスを選べ」。